

活法研究 I

— ニュージーランドIPCにおける柔道整復の普及実践 —

Study of *Kappo*, part 1.

— Introducing JUDO THERAPY to Diploma of International Sport Studies (DISS) staff in NEW ZEALAND (IPC). —

体育学部健康科学科

久保山和彦

KUBOYAMA, Kazuhiko

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

キーワード：武術 柔道治療 柔道整復 柔術活法

要旨：Judo Therapyは、世界における競技柔道の認知度と比較して、その認知普及度は低い。そこで、Judo Therapyの一つであるJudo Seifukuを、ニュージーランドIPC/DISSスタッフに対して講義、デモンストレーションすることで、Judo Seifukuを世界に普及させる端緒とする。

本実践は、New Zealand IPCにおいて柔道整復師（久保山）が、講義やデモンストレーションを行う過程において、自らが感じ取った事を、記述する事で、単にその認知度を質的に調査するだけではなく、柔道整復研究者として、今後どのような「研究や活動を行うべきなのか」を検討する機会としたい。

本実践から1. 2. 3. 4. の課題を見出し、今後の自身の研究を進めていく。

1. 日本において体育、福祉、医療の分野で活用され、公の評価を得ているJudo Therapyの文化人類学的、民族誌研究エスノグラフィー記述等、の記述研究を通じて質的調査の必要性を痛感。
2. 活法は、その「技術のみを指す言葉」ではなく、武術修行で培われる精神性が治療効果を支えている。結果、施術者自らの「心の操作法」が患者にも影響を与えている。柔道研究の分野で探求されている「伝統的観察法と心法の研究」を今後も継続する。
3. 武道医学独自の視座を構築し、医科学研究方法と統合させ、「現象の解釈学」「場の科学」に学際的な厚みを付けた研究を行う。
4. 「活法」は、伝統的な技法であるが、現代の柔道指導要領、講道館審判規定、国際柔道審判規定等のいわゆる「ルールを管理する側」に対する、「安全管理教育」が、全く登用されていない。そこで「応急的蘇生術」の普及の可能性を探る。

Keywords：Martial Arts, Judo Therapy, *Judo Seifuku*, *Jujutsu-Kappo*

はじめに

柔道整復が、厚生大臣免許として日本の国家資格として認められたのは、1989年の事である。現在では、柔道整復師の免許登録者数は、6万人を超えた。この増加の背景に、柔道整復師を志すものが増えている事情に加え、「その事情を受けて増加した」養成学校の数も関連している。Fig.1. は、平成12年から平成22

年までの間に増加した、柔道整復師及び関連医療業種人数の増加率を調査した資料である。

Fig.1. にもある様に柔道整復師の登録者数の増大は、他の関連医療業種者に比較すると特徴的である。

さて、柔道整復そのものについてであるが、これは、日本の柔術の「活法」が、時を経て「医療技術」に変容したもので、江戸時代から伝承されてきた「治療技法」である。嘉納治五郎の柔道創設以降は、主に

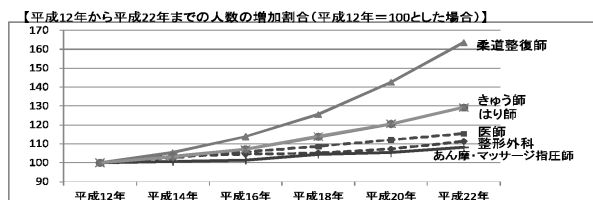


Fig. 1. 厚生労働省調査（柔道整復学校協会まとめから）

柔道家に伝承され「ほねつぎ・接骨・整骨」の名称で民間に普及した。

今回のニュージーランドにおけるフィールドワークは、海外（ニュージーランド）において、「柔道整復という事」が、どのように認識されているのかを「参与観察的手法」を用いて調査を行った。その際に得た知見を整理してみると、

1. Judo Therapyという事は知っている。でも、Judo Seifukuは知らない。
2. JUDOとどう違うのか？
3. Martial Artsと、どのような関連があるのか？
4. Self Defenseのことなのか？

というものであった。これは、IPCにおいて、自身がめぐり歩いた際に行った、「自己紹介での言葉のやり取りを集約したもの」である。これを、更にわかりやすく、まとめてみると「柔道をやっている人。」「柔道治療という日本的な医療があるという事は知っている。(それは日本のマッサージ法？オステオパシー?)」「柔道と医療治療がどこで繋がるの？」等の「問いかけ」を受けている様に感じた。こうした「問いかけ」は、海外に限られたものではなく、日本国内においてさえ、同様である。つまり、国内外を問わず「柔道整復の事をあまり知らないのである。」これまで、自身、柔道整復の実践者であり、その技術の伝承に多くの時間を傾けてきた。本年、研究者として、新たなスタートを切ったのだが、「これまでの活動」を、改めて見直し、研究の場において柔道整復を正面から扱い、国内外に発信していくための研究の蓄積をおこなっていく責任を感じた。

さて、前述「問いかけ」に対する責任説明には、その準備として、しっかりと「柔道整復の文化史記述の基礎」を耕した上で、「哲学」を練り、「熟成」させ、それに次いで「現代的医科学研究」の枝葉を構成させる。そして、その成果が「社会的活用法」に結びつかせる事で、始めて「説明可能」となると考えている。

活法研究の背景

I. 柔道整復の現状

柔道整復の治療対象は、骨折、脱臼、捻挫、打撲等の外傷やそれに付随する、患者の痛みであり、悩みである。これらの症例を近代的医学の知見をもととして、観察、評価、治療を行うのではあるが、整形外科医の存在性を第一義とした際には、「柔道整復の存在意義」は、その伝統性に寄り添わざるを得ない。

歴史的には、「武道熟達者」が、「柔道整復」を行ってきたのであるが、現代では、スポーツ全体に及び、さらに、スポーツ実践者以外の有資格者が、80%を超えている（調査中）を占めている。この有資格者の出自の多様性は、柔道整復が「医療資格」という存在性を保持するためには、ネガティブな要素ではない。しかし、身体文化の伝承性を考慮する際には、養成施設において「武道実践」「武道的心身論」等の日本身体文化の継承を説き、武術と医学が、融合の歴史を持っている事の指導や理解は、今後養成学校教育活動には必要と考える。また、著者は、今後の研究活動で「柔道整復の存在意義」をも問い直したいと考えている。これは、武道的精神性を近代的医療技術にのせて、施術効果を得ている事例の質的、実証的、現象観察的、現象解釈的な研究知見を蓄積していく事で、「施術者の心法」を明らかにし、前述「伝承性」という重要テーマを、単に「既得営業権主張」に類似した議論からの脱却の鍵になると目論んでいる。

そのために、自身の「親学問」として文化人類学研究や歴史研究を重ね、これを「活法研究」と名付け、本実践中に第45回日本武道学会の発表論文を執筆し、「kappoの系譜－柔術当て身技の変容－（Sep. 2012）」として発表を終えた。この「活法研究をハブ」として、Judo Therapy, Judo Seifukuを国内外に発信していく。

以下に研究成果の一部を紹介し、Judo Therapyの理解をはかる。

II. 柔術kappoとはなにか？

日本の武術の技法を大別すると、「勝負に臨み相手を倒す技法」と「自分の安全や健康を守る技法」の2つに分ける事が出来る。これらを「殺法」と「活法」という。柔道整復は、武術の「活法」が起源になっている。「活法」は、日本の戦国時代に生まれ、自分や味方の怪我や病気を癒すための、医療的な武術技法であった。

しかし、これは、その当時の、「戦士の心得」であり、[戦士-戦士]の間で行われていたため、武術技法の一つであった。つまり「施術者が、患者に行う医療技法」として認識されておらず、武術の技法であったため、「活法」と呼ばれていた。

戦乱の世が終わり、武術そのものが、相手を倒す方法から、競技をするための技法に変容し、また、自分を守る方法に変化していく。例えば武術の競技会や、自分を守る方法として「護身術」に変化していった。「活法」も同様に、戦士が戦場で行った技法から、庶民の日常生活に活用できる医療の技法になっていく。

「護身術の技法」などは、直接的には「医療技術」ではないのですが、自分の安全を守る技法として、早くから世界に紹介され、「相手を倒す技法としての「殺法」の範囲を越え、自分の安全を守る「活法の技法」として一般化し、「Self Defense」の名で、警備関連者の技法、軍事関連者の技法など、世界に広く紹介され、応用されている。

さて、柔道整復に直接関連のある「医療的な活法」は、中国から伝わった中国医学の経絡論、陰陽五行論や、ヨーロッパの近代西洋医学の解剖学、生理学等の基礎医学や様々な臨床医学の影響を受けて「変容」しながら、成立してきた。

ここで、「変容」とは、技法そのものを指すものではなく、施術の対象が、民間人に向けられた事をも含む。つまり戦いに明け暮れた戦士の「活法」は、戦士の武術技法から、それが、民間人の患者を対象とした「事例・症例」に向けて行う「医療施術」に変容した事をさす。また、活法は、戦場の「経験知」に、「医学的な説明」を付加される事で、医療技術として使用可能である事を、武術家が発見したのだ。

Ⅲ. 武術と医学の融合

楊心流柔術の開祖である秋山義時は長崎の小児科医であり、柔術家であったが、中国人拳法家（中医学者）陳元賛の教えを受けて、楊心流柔術活法を考案したといわれている。[久保山2012.] 秋山は、活法二十八手を伝書に図解しているが、いずれも、中国医学の心肺蘇生術、接骨術、薬方の影響を大いに受けている。この頃から「活法」は戦士の手を離れ、医療化が進んできた。また周辺から見つめる民衆文化も影響し、「活法」が民衆の日常生活に「医療として」入り込んできた。結果として「活法」は、医療文化に組み込まれ、戦士の経験のみで成立していた「活法」は、科学的知見と融合した、統合的な医学へと成立している。

く。

特に、江戸時代後期に、隆盛を極めた磯又右衛門(1780~1863)の天神真楊流柔術（嘉納も師事した流儀）の伝書において、地の巻（打撲、捻挫の治療法と薬方）天の巻（骨折、脱臼の整復法）陽の巻（五臓の図と全身急所一覧）陰の巻（その他四か条の活法）とあり、この伝書は、まさに医学書として構成されている。

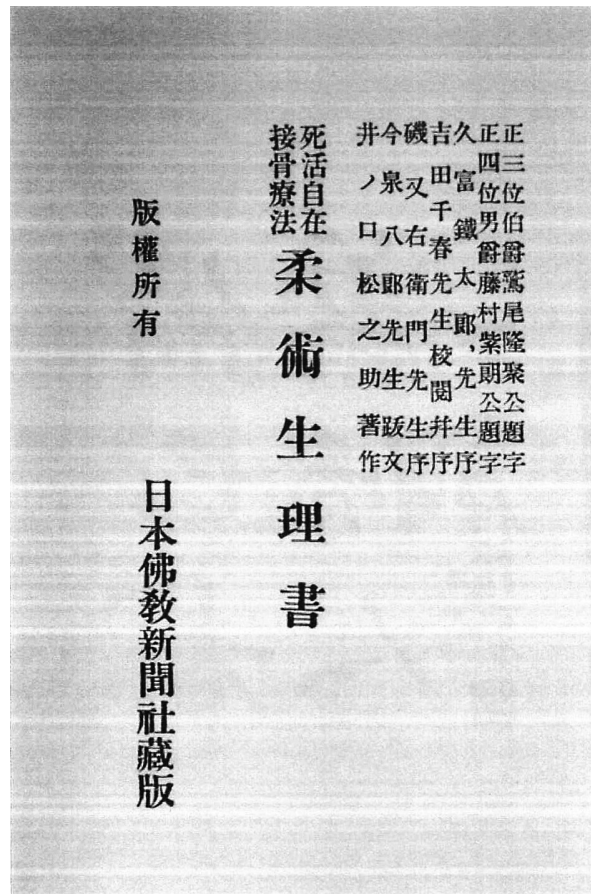


Fig. 2. 死活自在・接骨療法柔整生理書明治23年井ノ口松之助著

Ⅳ. なぜ柔道なのか？

柔術の活法は、戦士から民衆に開かれた。つまり、戦いの時代に蓄積された「経験知」は、伝書といわれる武術継承の「皆伝の証明」であり、各流儀内だけの「秘伝」として継承されてきたもので、「一般公開」されるものではない。しかし、海外医療文化の影響を受けて変容し、「医療的手段」として、開かれたのだ。そして、民衆の支持を得ていく。

同時期、「柔術」という武術は、講道館柔道に、組み込まれていく事になる。つまり、江戸、明治、大正、昭和の時代において、武術そのものに「変容」があった。この時代、200程あったといわれる柔術流派は、伝

承性に揺らぎが起きた。(1532年に岡山県建部に誕生し、その姿を変容せずに現代に継承される竹内流柔術は、日本最古の柔術流派とされている。[真柄1993。])

ここでは、江戸後期に隆盛を見た天神心楊流を例に、記述すると、幕末の時代は、文明開化混乱の時期にあり、柔術の戦闘技法は、「護身術」に活用された。天神真楊流もその波に飲まれる。「体さばき」と「当て身・逆（関節技）」を中心とする、素手の「護身技術ブーム」が起こり、民衆に開かれた。また、活法も医療として道場で施術される事となる。つまり、柔術道場において、「殺法」と「活法（接骨）」が同時に開院している事となった。多くの柔術家は、道場を開くと同時に、現代で言う「接骨院」をも開院していた。従って、同じ道場で行われていた「護身と活法」は、「ほねつぎ」「柔術」「柔道」「柔」「接骨」等の呼び名で、同じ意味として民衆に理解されていた。[鳥居1978。]中には、「柔術家」としてではなく、ほねつぎ、接骨を「町医者」として開業する柔術家が江戸期から既に現れ、「活法は医療化」が進む、一方で「柔術」そのものは、社会の安定とともに徐々に衰退していく。明治時代には、武術全体に影響を持つ嘉納治五郎（起倒流・天神真楊流皆伝）の登場により、「講道館柔道」が創設（1885.明治15年）された。嘉納は、柔術の使い手であったが、200以上あった柔術流派をまとめ、総合体育の一つとして「柔道」を創った。また、柔道は、ヨーロッパ的スポーツの理論を取入れており、心と体に与える教育効果が大きく、「競技力・体育・修身」の教育的効果が高いとし、交流試合で実証、「ハイカラな身体文化」と認知され始めた。そこで、民心は、「講道館柔道」という「近代的武道」に偏向していった。この時期から柔道と柔術を「一応分ける」呼び方として、古くから伝承される柔術流儀を「まとめ」、古流柔術という。

現代では、「接骨院」で行われる「柔道整復師」の施術を「柔道整復術」というが、本来は、古流柔術の「活法」の技法が、現代に継承されてきた「医療技術」なのである。

V. 「活法」にはどんな種類があるのか？

古流柔術において、「活法」を伝授されるには、免許皆伝者に限られる事が多く、それぞれの流儀の最高位に熟達する必要がある。また、伝書や口伝えにおいても、「手の使い方」手技においても細かな解説は存在しない。そこで扱心流、楊心流、天神真楊流等に伝わる活法の伝書を検証し、実験的研究を重ねた研究

者、浅見、手塚両氏の先行研究を参考とする。両氏は、特に、絞め技による「落ち」の心肺蘇生法を扱い、その技法を紹介し、医科学的な知見を提供している。浅見は、活法を記載した伝書を持つ流派を横断的に調査、すると100種類以上存在し、技法や目的の類似性を統合して整理すると、天神真楊流の伝書に行き着くとしている。その伝書にあるものは、誘導法、発心法、呼吸法、気海法、脱丸法、吐水法、溺死者対処術、人口呼吸術の八種である。



図 一 第
(傳口リアヒ達ノカ勢モドレナ様ニ同ト圖ノ法活入肺)

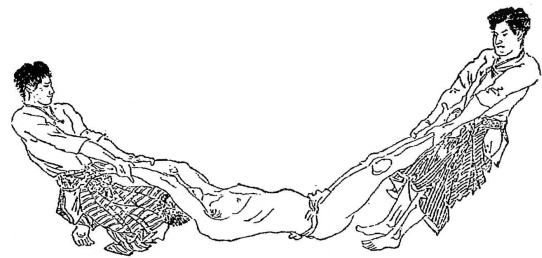


Fig. 3. 浅見高明著 武道における活法の効用 人体科学9. p45

主に心肺機能停止に伴う、救急救命処置（法）に集中している。しかし、これまでの研究には、投げ・逆・当て身などで発生した「怪我」を癒す技法に注目されてこなかった。つまり、後に骨折、脱臼、捻挫、打撲の治療法で、「柔道整復術」となる接骨術は、活法研究の舞台にはこれまでにあがっていない。著者は、脱臼や骨折の整復も「活法」の一部であると考えている。[久保山2012。] なぜならFig. 2. に紹介した柔術生理書には接骨療法の記述があり、伝書には、「接骨」を活法の一つの技法ととらえている。

Ⅵ. 武道修行で得られる医療効果も活法効果なのか？

近年の武道研究で、障害者が武道の特性を生かした練習を行い、教育的・福祉的・医療的・心理学的問題解決の効果があった事例が報告され、特にJudo Therapy（柔道治療）という手段で、心と体の双方に機能改善効果が得られた事例報告が多い。例えば、1）知的障害者の子供に対する運動療法として柔道を適用し、体力向上、精神の調整能力が効果として得られた。2）視覚障害児に対する柔道指導者の報告によると、柔道により子供たちの自信を構築し、荒れた気持ちを低下させた。3）脳性麻痺痙直型（Cerebral Palsy Spastic Type）の四肢麻痺の少年が、柔道の受け身を会得、乱取りを行った。[佐々木2006.「手段的価値」の事例1. 2. 3.]等の知見や、自らが、観察した東京都立青島特別支援学校における柔道実践の様子の中で、1）多動傾向の生徒の協調行動効果 2）ダウン症生徒の身体コントロール能力向上効果 3）自閉症傾向生徒の「相手への気遣い」効果が見られた。など、これらも「柔道整復の活法効果」であると考えている。[久保山2011. 参与調査] これは、武術修行の精神的、哲学的な達成目標で、「生き方」「活かし方」「どのように生きるべきか」等の、「武道心法」の効能を示した事例で、武道は、その技法の競技性向上（試合で勝つ）のみを指すものではありません。[村田2012. 柔道形の心法] ですから、柔道を行う事の目的は、相手に勝つ手段のみではあり得ない。Judo Therapyは、柔道という手段や柔道独特の、心と身体全体の「構え」「体さばき」「間合い」、その「精神性」を、フルに活用した「治療法」なのである。Judo Seifukuにおいても同様で、「怪我の治療」だけが、柔道整復師の仕事ではありません。その予防やコンディショニング、リハビリテーションはもとより、身体だけでなく「心の悩みを解決する術」でもある。これらも、「活法の効果」だと考えている。[久保山2006.]

IPCでの実践報告

これまで、柔道整復の学際的分野での研究は、柔道研究の延長でなされたり、スポーツ医科学、臨床医学（整形外科、リハビリテーション医学）、等に、いわば寄り添う形で成立してきた。こうした連携は、研究活動だけでなく、柔道整復師の社会的活動にとっても非常に重要性があった。これからも、続けていくべきである。反面、伝統医学である「柔道整復の特徴的研究」の学際的分野での成長は、まだまだこれからである。

これは、柔道整復教育を行う大学教育機関の開学をみて、まだ年月が浅い事もあるが、研究分野における「柔道整復イデオム」が、存在してこなかった事にも起因すると考えている。この「イデオムの構築」は、柔道整復の研究者自身が「様々な学問領域の鞭撻を受け入れ」自ら成長する機会を得ていく必要がある。本実践は、大学教員という立場で行ったものではなく、単に柔道整復の実践家として行ったものである。当然、前述「イデオム構築」に向けられたものであるが、結果として学問領域における可能性を探り当てる事が出来た。それは、自身の「柔道整復研究のハブとしての活法Kappoの発見」である。活法研究は、柔道整復研究を学際的イデオムに適応可能にする「翻訳装置」になりうる。

さて、本実践の滞在期間は、2012. Oau. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. という短期間ではあったが、多国籍学生とともに、学生寮に暮らし、学食にて共に食し、特にベトナムからの新入生との、Palmerston Northの中心地における交流や、スポーツレクリエーション活動などは、自身が望んだ「参与観察」という研究手法を十分に実践する機会となった。また、8月12日（日）には、IPCのDISSスタッフに対してJudo Therapyの紹介、デモンストレーションを行う講義の機会も得た。講義の終わりには、「I'll be back.」と握手を交わした。



Fig. 4. photo

I. 実践の背景

自身2012. 4月IPU新着任で、IPC情報を全く有しておらず、学内状況にも不慣れであったが、さらに、国際交流センター川崎由香准教授に、ニュージーランド及びIPCの状況についてご教示していただいた。その中で、Diploma of International Sport Studies (DISS)の事を知り、自身の活法研究の端緒として「行動観察

(しぐさ)を通じて、動作コーディングシステム開発」を目指す、研究計画を持った。この研究は、現在も進行中であるが、当時、様々な、「研究助成の申請」を試みたが、いずれも受理されず、渡航そのものを中止せざるを得ない状況であった。(「申請」を振り返ると、研究のテーマの明確化や計画の設計等に問題があったと解している。)そこで、渡航計画の練り直しを行い、学内行事、費用、等の諸事情を鑑みて、本実践の期間とした。

川崎由花准教授にIPC教務主任佐々木氏の紹介をいただき、時に間接的に、時に直接的に、E-Mail, Skye等を用いて調整を行った。

以下は、自身が佐々木氏を通じて、DISSの責任者(ピーター氏)に、行ったアクション文である。

When people think of “Judo”, what comes up to most of their minds is only the competitions (like what we see in London Olympic games), which means defeating your opponent - not only physically but also mentally. This aspect of martial arts was called “Sappo” in the era of samurai warriors. On the other hand, “Kappo” was the art of survival, the way of dealing with one’s own physical and mental damage that occurred as a result of the opponent’s “Sappo”. Today, “Kappo” is part of the medical system (the modern name is Judo Seifuku). My research is mostly in this field.

So this time, I’d like to introduce Kappo to IPC students, through relation of the history of judo or jujutsu, and medical treatment. I’m planning to make a poster of my Kappo research and post it up somewhere at IPC so that students can understand the real meaning of the martial arts.

And also, I want to improve my English in order to write monographs or do some research abroad in the future.

With best regards,

Kazuhiko Kuboyama

このメールをきっかけに、本実践計画が動き始めた。

II. 実践内容

渡航を見据えての準備の際に、本報告の「はじめに」を構成した柔道整復(kappo)紹介文の英文化を行った。その一部を以下に示す。

The origin of Judo Therapy During the Warring States period of Japan (15th~16th century), there

was a history of fighting between the districts for more than 180 years (Onin War 1428 ~ raising of the Edo Shogunate 1605). The warriors actively practiced “martial arts”: mental and physical training for the fight, fighting techniques, weapons and armor skills (weaponless) were greatly developed. In this study, we focus on the bare hands martial arts (Jujutsu) and “kappo” (Medical Technique and self-defense). “Sappo” is a martial art, practiced and used to defeat your opponent (not only physically but also mentally). On the contrary, “kappo” is the art of survival. Both were correspondingly used by the great warriors during the Warring States period. “Kappo” was a way of dealing with one’s own physical and mental damage that occurred as a result of the opponent’s “sappo”.

Today, “kappo” is part of the medical system. However, in those times “kappo” was used by warriors, and therefore considered as martial art. In other words, kappo was one of the alternative techniques of “sappo” martial arts. In addition, in this era the life of the warrior was not very valuable, so priority was given to “sappo”. For “kappo” as part of martial arts, to become a system of medical techniques (like the modern Judo Seifuku today) treating fractures, dislocations, sprains, bruises, muscle strains, “kappo” had to make a step out of the “Warriors hierarchy” and become available, practiced and supported by ordinary people……. In other words, for “kappo” to become part of a medical system, it was necessary for martial arts to enter the life of ordinary people.

III. 実践中の発見

実践当初、IPCの学内において「ポスター発表」を予定していたが、実現にはいたらなかった。しかし、連日IPC図書館を利用させていただき、Martial Arts Judo Therapy Judo Seifuku Jujutsu-Kappoの関連図書の蔵書を調査する事が出来た。主に、武術や柔道の紹介研究を、セルフディフェンスに結びつけた図書が多く存在し、Martial Artsの技法に向けられた期待が、Self Defenseにある事がわかる。又、自身が日本において、目にしていなかった、Kappoの紹介文献を発見した。

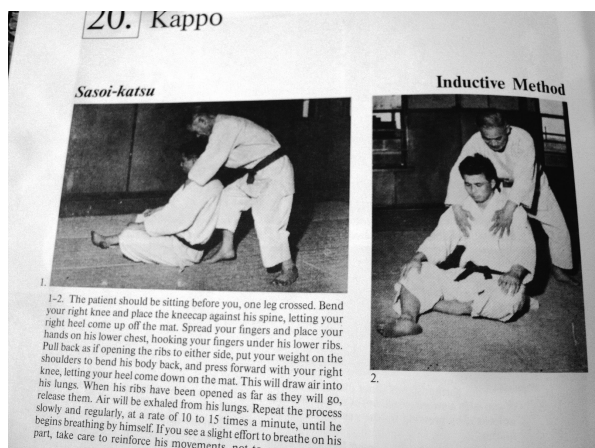


Fig. 5. Kodokan Judo (1986) pp136. 142. 252

以下に自身の研究に関わる発掘文献を記す。

John Corcoran and John Graden (2001) The Ultimate Martial Arts Q&A Book pp. 149, 159

G, Cameron Hurst III (1998) Armed Martial Arts of Japan Yale University Press

Barry Davies Bem (2001) SAS Active Library SELF-DEFENCE Harper Collins Publishers pp. 78. 84. 213, 239

Dr. J. C. Canney (1988) Health and Fitness in the Martial Arts

John Stevens (1995) Three Budo Masters Kodansha International Ltd. pp. Kano (Judo)

Kodokan Judo (1986) Edited under the supervision of the Kodokan Editorial Committee. pp. 136, 142. 252

Allen Guttmann, Lee Thompson (2001) Japanese Sports: a history pp. 42. 56.

Diana Warren-Holl, Denise Rossell, Rachel Stewart (1987) Self-Defence for Women pp. 64. 68. 72.

Alex Butcher (2001) Judo The essential guide to Mastering the art. New Holland Publishers. ch7.

Donn F. (1990) Classical Budo The Martial Arts and way of Japan. Volume I. II

以上。

IV. DISSスタッフに向けた柔道整復紹介

IPC佐々木氏に日程調整していただき、2012. 8. 17にDISSのスタッフ3名の参加が実現した。柔道整復の実践家である、自身の出自の紹介プリントを作成し、配布した。それを示す事で、私、柔道、柔道整復、活法を、IPU教員という「組織的くくり」の中から、一旦解放して、「一人の柔道整復術実践家」が目の前にあり、「忌憚のない実践や議論の場」になる事を望んだ。英会話の頼りない自身の能力を、十分に補って

くれる。素材として、「自己紹介、実技紹介、意見交換」に、機能した。実際には、「手書きの図解プリント」A4. 3枚であったが、その補足説明に用いた英文キャプションのみを記す。

Welcome Judo Therapy

A→ Judo Seifuku

I have teached

Co-medical school treating technique Fractures,

Dislocations,

Sprains,

Buruises,

Muscle Strains,

A→ area Medical

B→ Judo Master

Instruct Children, Grow-up people, Elderly people and Disabled people in Judo.

A. area Martial Arts (Welfare)

C. Physical Education

I graduated from "Japan Physical Education College in the department of Martial-arts" with the level 5 Judo.

A. area Physical Education

Jujutsu Kito-Ryu Tenjinshinyo-Ryu

Sappo fight Kappo self-defense

Kodokan judo Jigoro Kano Olympic games modern sports

Judo Seifuku Honettugi

Notes and references

まとめ

Study of *Kappo*, part 1. —Introducing JUDO THERAPY to Diploma of International Sport Studies (DISS) staff in NEW ZEALAND (IPC). —Oau. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20.) の実践から見えてきた事。

活法をハブとし、柔道整復の国内外での学際的認知度を向上させるのは、簡単ではない。しかし、伝統医学は、その社会で長い年月を経て継承され、その医療的価値を認められている医学思想、技術である。いわば伝統的身体医療文化である。また、厚生労働大臣資格者、健康保険を扱う、極めて特異な国家社会的評価を得ている医療資格者として、地域医療の一翼を担っている。つまり、既に「社会の健康を支える有益な活動」を行っている。この社会活動を、研究分野に持ち

込み、柔道整復研究者として、自身の研究に取り込むためには、「活法という装置」が必要である事を本実践通じて再確認した。また、研究成果を社会に再還元する活法活用のシーンを4つに分類し、実践まとめとする。

1. 体育・医科学的活動

フィットネスプログラミング（様々な身体条件を持ったクライアントに対する運動処方）の際の安全管理への活用。AEDを使用する前の応急的「心肺蘇生術」へ。例えば「腹活」等は、有効に作用するのではないか。（GMS製アクティブトレーサー小型心拍計を用いた医科学的研究をIPU女子バレーボール部員、監督、コーチを被観察者として行っている。）

2. 教育的活動

柔道絞め技における、いわゆる「落ち」の対処法を、医科学的根拠のある活法として、武道技術教育の中に「組み込み」、柔道指導者の「落ち」に対する迅速な対処の確立を狙う。（「胸活」の現代的技術法の構築（救急救命士；金井）、教育現場における教育法の構築（日体柔整専門学校；服部）

3. 福祉的活動

「武道と感覚統合」への提言。学習障害児、自閉症児に対する福祉的教育アプローチの手段として、武道（柔道）を行い「福祉的治療効果・医学的治療効果」を得た実践的研究報告を多く目にしてきた。こうした効果を、観察的手法を用い「現象・解釈」的に久保山が検証した際に、「活法」の力が働いたと見ている。

「道場という場における。柔道指導者とクライアント」の間に、働いた「機能的なちから」を、「行動の変容」のつぶさな記述から今後も、検証していく。（【里山探検活動ドキドキ；身体教育医学研究所、遊びと感覚統合（障害児教育）；子供教育支援財団・子育て支援プロジェクトリーダー研修】）

4. その他

Judo Therapy (Judo Seifuku)、日本の伝承的民族医学の世界への発信。柔術・柔道の活法系譜研究（歴史研究）から、柔術の技術として「接骨術」も「活法」に含まれている事を見出した。現代医学の中で制度化され、様々な施術の効果は、実証されているが…。国際的に学際的舞台での評価は薄い。今後も医科学的、実験的、手法で研究普及を行う。

参考文献

- 手塚政孝 2000. 柔術活法の文献研究 明治大学紀要 pp146.
- 手塚政孝 2004. 古流柔術「殺法」に関する文献研究 明治大学紀要 p335
- 佐々木武人 2006. 武道特性を応用した精神障害者運動療法の可能性について スポーツ精神医学 3. pp33-36
- 浅見高明 2000. 武道における活法の効用 人体科学 9. pp43-56
- 久保山和彦 2012. 活法の系譜－柔術当て身技の変容－ 45回日本武道学会抄録Ⅱ-A